
俺とP'Ker Killing_完全版

いざよいキラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とP・Ker Killing | 完全版

【Nコード】

N0621A

【作者名】

いざよいキラ

【あらすじ】

ネットゲーム。ひとつひとつのキャラクターに魂が宿り、日夜、おびただしい人間ドラマが生み出される、電脳世界。現実世界とクロスオーバーする魅力的な舞台を、この俺が見逃すはずはない。だが、意気揚々と降り立つ俺を待ち受けるのは、現実社会と同様、弱肉強食の真理……。今、灼熱の正義が目覚める。

風雲虎の巻

突然、視界が灰色に染まった。

目の前に横たわる、屍らしき物。
どうやら俺は、殺されたらしい。

モンスターなどではなく、本来なら味方であるはずの、
プレイヤーキャラクター
PCによつて。

「f e f e」

殺人者の証。赤色の名を頭上に冠したPCが、

初めての狩りで稼いだ数千ゴールドを、
なけなしの貯金をはたいて買ったマジックを、

俺の身体から奪っていく。

プレイヤーキラー
これがPKか。

なんてこつた。

初めての狩りでPKの洗礼とは…

PK「＼（＾O＾）ノ w a - i」

ちつ、顔文字かよ。

俺は、赤く映し出された殺人者全員の名と、
忌々しい、その姿を

全力で、脳髓に叩き込んだ。

- - - - -

俺とP・Ker Killingの序章
？風雲虎の巻？

- - - - -

PKがゲートに消え去るのと入れ違いに、
三人のプレイヤーが画面の外からドタドタと土煙をあげ、やって来
た。

全員、青ネーム（非犯罪者）だ。

熊マスクを被ったフェンサー（槍使い）。
ハイキングに行くような軽装の女性。
トライバルマスクに包丁とタイマツ…

最後はナマハゲだろうか。
ピーカーキラ

PKKにしては、

いささかアレな格好だが、多分、そうなのだろう。

「遅かったか…」

「だから二箇所マークしとけて」
「いったじゃん！」

「@反省」

仲間内で、何やら話し込んでいる。
やがて、その中の一人が叫んだ。

「どこにいるのー」

「でてきてー」

どうやら、霊体の俺が見えないらしい。

「oooo」（ぼーぺん）

生身の人間に、はじめな亡霊の声は届かない。
適当に返事をする。

「いたいた」

A n C o r p（蘇生の呪文）

モノクロームの世界が一瞬でフルカラーに変わり、

I n V a s M a n i（治癒）

I n L o r（明かり）

I n V a s M a n i

I n V a s M a n i

I n L o r

I n L o r

I n L o r

I n L o r

I n L o r

In Lor

光輝く癒しの雨が、俺に降り注いだ。

Night Sight (In Lor) が無駄に多いのは、何かの皮肉か。

「ゲート出しますよ」

「どこへ行きますか？」

【一般プレイヤーで溢れ返る、王都ブリタニア第一銀行前】

都会の喧騒をBGMに、PKKの三人とマッタリした時を過ごす。

この時、俺の中には、一つの決意が芽生えていた。

二章へ続く

風雲虎の巻（後書き）

専門用語多いです。知らない人、ごめんなさい。

2・君は僕に、死ねと言うのか（前書き）

「俺を殺した奴を見つけ出し、仇を討つ」20世紀にネットゲームができるまで、絶対にありえなかった言葉だ。なぜかって？ハハハ。私はそれを懇切丁寧に説明して差し上げるほど、野暮ではないよ。

2・君は僕に、死ねと言うのか

「そうねー」

「どうしようかしら？」

ポリゴン世界の住人なのか、
なぜか落馬しながら軽装の女性が答えた。

そう、俺は今。

例の三人組に「PKKギルド入れてくれ」と、
お願いを申し上げる最中だ。

「じゃ、ひとつ」

「テストをするわ」

？

「このゲートのさきでまーくできたら」
「ぎるどにいれてあげます」

そう言つて、ブランクルーンを押し付けてくる。
どうでもいいが、ひらがなの多い人だ。

V a s R e l P o r (移送の呪文)
彼女の背後に、青白いゲートが現れた。

「アイテムは全部、銀行に預けたほうがいいよ」

熊戦士からの忠告。

なるほど。

俺のプレイヤースキルを試すというのか？

面白い、血がたぎるぜ。

俺は言われるまま、全ての荷物を銀行に預けると、
喜び勇んで、ゲートに飛び込んだ。

- - - - -

俺とP・Ker Killing第二章

？君は僕に、死ねと言うのか？

- - - - -

…ワシャワシャワシャ…

ゲートを抜けると、

そこはどこかの砂漠だった。

バーディッシュュを持った蛇男がウジャウジャいる。

ここは距離を置いて…と、

思うそばから瞬殺。とりあえず帰還する。

「ww」

一瞬で亡霊と化した俺を迎える、メンバーの暖かい大爆笑。
すぐさま蘇生が施された。

「そこは無理だろ…」

「ワシの腕でもできんわ」

会話から察するに、かなりの危険地帯だったようだ。
恐らく別アカウントのyoungキャラでマーキングしたのだろう。
廃人め。

「いまのが難度A」

V a s R e l P o r

再びゲートが開かれる。

「難度B」

「どんなところか、少し教えてくれ」

「ネズミーランドです」

「…」

次は、真っ暗な小屋の中だった。

キーキーキー…瞬殺。

「難度C」

今度はドラゴンに囲まれた。

瞬殺は免れたが、触れた瞬間、即死。

これは、新手のイジメだろうか？

いつの間にかギャラリーが沸き、
全く無関係な人まで即死ゲートをくぐっている。

その後、

難度Fで、ようやくマークに成功し、
俺は晴れてPKKギルドの一員になった。

そこからは、金に糸目をつけない猛特訓を経て、

【特訓メニュー】

一日、緑先生

二日、ローソクスパー

三日、幽霊船

空き時間、寝マ（自主規制）

三日で4GM。

やはり世の中、カネとコネだ。

swordsmanship		100
tactics		100
parrying		100
anatomy		100
healing		81
magery		71
evalint		90
regist spell		58

俺は頬を赤らめて、熊戦士にスキル構成を告げる。

スキル構成…それは、
700ポイントの狭間に全人格を映す小宇宙。
軽々しく他人に教えるものではない。

「OK、84点」

彼は満足げに頷き、合格点を出した。
俺の小宇宙は84点らしい。

「そろそろ」

「対人戦の練習しようか」

「わたしがでるわ」

「さあ、かかってらっしゃい」

「ぼうや」

軽装の彼女が鍛冶用のトンカチを構え、
妖艶に微笑む。

いよいよ実戦か。

いい機会だ。

即死ゲートの恨みを晴らしてやる。

俺はニヤリとほくそ笑み、スラリとHQカタナを抜き放った。

三章へ続く

2・君は僕に、死ねと言ったのか（後書き）

操作ミスりました。恥ずい。

いくら努力しても叶わなかった物が、ある瞬間にアッサリと手に入る。それが空

P K Kが正義の味方？いいや違うね。あいつらは、陳腐な正義を振りかざして殺人を楽しむ偽善者、俺らと同類だよ。お前はどうかんだい？殺人ゲームは楽しいか？夢の中の影が、いつまでも嘲う。…癪に障る、笑い声だ。

いくら努力しても叶わなかった物が、ある瞬間にアッサリと手に入る。それが空

【CAUTION】

この作品には、

グロテスクな表現や、

暴力シーンが含まれています。

- - - - -

一面、灰色の世界。

目前に横たわる、無様な亡骸。

やはり、俺は殺された。

なんてこった。

ここ数日、死に過ぎじゃないか、俺。

「わーい」

「うんどうしたから」

「おなかがへったわ」

「HEHEHE...」

ナマハゲが包丁片手に、俺の屍へと歩み寄る。
薪を切り出して、焚き火を始めた。

一体、何をしているのだろうか？

「よっしゃ焼けた」

「やきにくやきにく」

…。

ま、まさか

ポリポリムシヤムシヤ

- - - - -

俺とP・Ker Killing | 三章

?いくら努力しても叶わなかった物が、ある瞬間アッサリと手に入る。それが宿命だ?

- - - - -

姉さん、事件です。

ギルメンが、僕の身体を食べています。

僕は、入るギルドを間違えたかもしれませんが…。

「うめえ…うめえよ あ、今」

「ワシの脳内で夕食が決まったw」

人間以外の肉にしるよ。

ムシヤムシヤ

「げーむでおなかいっぱい食べても」

「なんかむなしいよね」

ポリポリ

パクパク

まだ食ってる。

人肉を食う暇があったら、先に蘇生してくれ…。

A n C o r p

アフリカ秘境の雰囲気存分に満喫する俺を優しく包む、熊戦士のレス（蘇生）。

そうだ。

この人はマトモだ。

「対人のコツなんだけど…」

そして、彼は何事もないようにレクチャーを始めた。
これはこれで、怖いものがある。

【熊戦士の対人戦講座】

- 1．とにかく走り回れ
- 2．魔法で先制攻撃
- 3．回復は全て巻き合い
- 4．U O A は素敵ソフト。買え

とのことだ。

田舎の珍走団と同じくPKは三人組が多いから、
先制攻撃で一人、確実に倒せば、
あとは楽勝なのだろうな。

俺がデビューしたのは、その翌日だった。
始めてから一週間でPKKになる奴は珍しいそうだが、
よく分からない。

お約束で、

「初めて人を斬ってしまった…」

と、言っておいたが、

まあ、どうでもいいだろう。

それからは、何組のPKを狩っただろうか。

毒使いナマハゲの援護を軸とした俺たちの連携は、
まさに無敵だった。

そして、

一ヶ月の無料期間も終わりに近づいた、
ある日。

最初の死を経験した、あの場所で、
俺は、ついに奴らを見つけた。

忌々しい、姿、名前…間違いない。

俺を殺した、顔文字野郎だ。

やっと見つけたぞ。

「瞬きする間に殺してやる」

C o r p p o r (攻撃呪文)

俺はエナジーボルトの詠唱とともに、
先陣を切って、走り出した。

四章へ続く

いくら努力しても叶わなかった物が、ある瞬間にアッサリと手に入る。それが
閲覧数、結構いつてますね。どうなんでしょ、これ。

AWCの青いフルプレート（前書き）

人肉を食べた。家に忍び込んでアイテムを奪った。

GrandMaster Bardの近くにいるだけで音楽スキルが上がる。回復手段は自然治癒だけ。

物陰に身を潜め、星を眺めて傷が癒えるのを待った…もう戻れない、あの夏。

彼の肩に耳を預け、私はGMになった。

それを合図に仲間の集中砲火。

奴は文字通り、瞬きする間に葬り去られた。

味も素っ気もない仇討ちだったが、
これが現実というものなのだろう。

あとは、愛の毒連射（本人曰く）と、
最速武器力タナで詠唱妨害。

そして、適度な壁出しで退路を断つ。
いつも通り。とどこおりなく作業を終えた。

俺はこうして、見事に復讐を遂げたわけだが…

「はた迷惑な奴等だ」

「コンビニ駐車場の田舎ヤンキーじゃあるまいし…」

思ったほど、嬉しくもなかった。

とりあえず屍を裸にして、

記念写真（screen shot）を撮る。

「みんな、たいくつなのよ」

「わたしだって・・・」

傍にいた彼女の、意味深な言葉…。

俺は大して気にもせず、それを聞き流した。

- - - - -

俺とP・Ker Killingの四章

? AWCの青いフルプレート?

- - - - -

それから間もなく、

彼女はギルドを脱退することとなる。

時は、

犯罪禁止の世界?トラメル?が現れる直前の、

1999年

そのころ、主要なダンジョンの周辺は、

常に多数のプレイヤーキラーが陣取っていて、

狩りのままならない状況が、長く続いていた。

彼女が抜けた穴は大きいが、ギルドは既に

20人を越える、大規模なものへと成長している。

俺たちは7〜8人のチームに分かれ、

ダンジョンを一つつつ、解放していった。

- - - - -

【デスパイズ】俺

入口のトラップ・炎の壁(Fire field)によって、
半数が戦力喪失。

【ダスタード】熊戦士

広場のような地形が災いし、数で押し切られる。

【コトブス】ナマハゲ

地形によってPKの勢力が分散。辛勝。

初めのうちは、数に勝るPKが圧倒的優勢だった。

しかし、容易に補給ができる俺たちと比べ、
殺人者の赤ネームは一度でも死んでしまうと
蘇生が非常に困難な上、スキルが大幅に下がる。

【デスパイズ】俺 & ナマハゲ

計略？砲台？を採用。著しい戦果を挙げる。

【ダスタード】熊戦士

幽霊による偵察制度を導入。ゲリラ戦略へシフト。

？砲台？の解説。

大勢で敵密集地のど真ん中にテレポート。
攻撃魔法を撃ちまくって壮絶に自爆。

こうして時間の経過に伴って、
戦況は徐々に、PKKへ有利なものとなる。

そして、最後の砦。【精霊の遊戯場―シェイム】

ここは特にPKの数が多く、今まで手をこまねいていたが、
ギルメンと助っ人、数十名が今、
入口前に集結していた。

「赤ネームを見たら、躊躇わず討て」
「総員突撃！」

熊戦士の号令とともに、青ネームの軍勢が歓声をあげて、
シェイムに突入した。

俺もICQの指示に従い、奥へ奥へと進む。

辿り着いたのはゲイザーポイント。
そこは、激戦のさなかだった。

累々と積み上げられた、屍の山…。
その中に立つ、人影がある。

それは…

五巻に続く

AWCの青いフルプレート（後書き）

次回、かなりパクリ入ってます。

決戦前夜（前書き）

【演説から抜粋】

「なぜ僕らは戦う？」

「お金を貯めてレアアイテムを買うのか？」

「それとも、家が欲しいのか？」

「違う！」

「そんな物は彼らを何百人、倒そうと」

「絶対、手に入らない」

「敵を打ち倒し得られるものは、何だ？」

「item、GP、無意味な名声値」

「そして、もう一つ…」

「多くは語らない。語る必要もない」

「ともに無数の死を潜り抜けた諸君なら」

「もう解っているはずだから」

百の英雄が一齐にnight sightを唱え、黒ポーションを飲み干した。

音と光の奔流が、微弱なスローモーションを引き起こす。

「その答えは、決戦の先にある」

熊戦士は、消滅の光“Vanquishing”の輝きを帯びた長槍を振りかざした。

『赤ネームを見たら、躊躇わず討て!』

決戦前夜

そこには、

軽やかな全身を漆黒に染めて、
かつての仲間が佇んでいた。

PKKギルドのメンバーとして、
俺とともにブリタニアを駆け抜けた、
彼女が。

名前は…赤。

まさか、あいつがPKに…

いや。

同性同名の別人に違いない。

俺は震える手で
奴のペーパードールを開き、
プロフィールをチェックした。

p r o f i l e

G r a n d m a s t e r w a r r i o r

リアル女子高生です。

UO大好きな眼鏡っこです。

よろぴく

どれくらい好きかっていうと、
お正月に寝言で

「…テレキネシス…」

「二回かけるとロック外れるから…」

とか言いながら、

夢の中で実物大の樽をゴトゴト外しまくるくらい
(以下略)

この嘘臭いプロフは…間違いない。
彼女のものだ。

なんてこった。

俺は…

「ここ、懐かしいわ」

「覚えてる？」

俺の胸中を嘲笑うかのように、
彼女がゆっくりと近づき、問いかけてくる。

戦場には、不釣り合いな光景だ。

「…憶えているさ」

「二人でエルゲー、殴ったわよね」

「ずっと昔のことのように思えるわ」

「ああ、ずっと昔だ」

「遠い…遠い、昔のことだ」

渦巻く爆音と剣戟、断末魔の悲鳴。

そんな周囲の喧騒すら、二人の耳には入らない。

「君は変わったな」

「うん」

「ひらがな喋りが少なくなった」

「w」

「貴方は相変わらずのようね」

「…」

2...1...0

MPが全快した。

「プレイヤーキラーになった私を、殺すの？」

「そうだ」

「PKKは、PKを殺す」

一歩踏み出し、愛刀のS・HQ?Kouichii?を構える。

「練習じゃ、いつも私が勝っていたわよ」

彼女の右手に、戦闘用の鉄槌（war hammer）が現れた。

「俺はもう、昔の俺じゃない」

「私だって、昔の私じゃないわ！」

最大の禁忌？漆黒？

彼女は本当の死を覚悟している。
アカバン

決戦が始まった。

六章へ続く

【S-HQ】super-high quality

腕利きの鍛冶屋が作った武器は、威力が15-35%上乘せされる。

その中で30%以上の物をS-HQと呼んだ。

スパリングを行い、ダメージの平均を求めて選別される。

【漆黒】

当時、違法ソフトで作れる漆黒の服はアカウント剥奪の対象でした。

放置かな…と思わせといて、一斉検挙。

阿鼻叫喚の地獄絵図は、現在も語り草になっています。

決戦前夜（後書き）

ソードワールド最高です。

推理小説のほうも、宜しく願います。

<http://www.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0658a/>

平和への序奏（前書き）

「修理完了」

「ほれ受け取るがいい。おぬしで最後じゃ」

老いた鍛冶屋がソーサリアを去った、その日。
俺は一振りのカタナを手に入れた。

S-HQ “kouichi”

引退した後も、自分の名前が残る。

悪くない気分だと言い、彼は笑っていた。

平和への序奏

「いくぞ！」

俺は四色のポーションを飲み干して、
一気に間合いを詰めた。

赤でスタミナを回復しながら、
張り付きで殴り続ける戦法だ。

「ふふ」

「戦い方も相変わらずだわ」

ガシャーン

ウォーハンマーの初撃で、ブレストプレートが破損！
だが俺は動じない。

暴かれた素肌を、青い鎧が瞬時に覆い隠した。

「ワンボタン・ド레스アップ」

「君に教わった技だ」

「フツ」

「忘れたわ」

「そんなことッ…！」

二人は貪るように、激しく戦い続ける。
青と漆黒が、目まぐるしく交錯した。

「貴方は知らないのよ!」

「このゲーム(uo)はね」

「二年も続けると」

「何も、することがなるの」

「家を建てた!」

「レアもコンプした!」

「もう、やり残したことはPKしか…」

ウォーハンマーのクリティカルヒット!

三つ目の鎧が、粉々に砕け散った。

「これで最後にしようと思っていたのに…」

「どうして私の前に現れたの?」

「貴方さえいなければ、こんな思い」

「しなくて済んだのに…!」

強い。

器用に叫びながら戦う彼女に対し、

俺はポーシヨン、包帯、防具の装填と忙しく、

口をきく余裕は全くない。

装備の差も災いして、

戦況はジリジリと劣勢になっていく。

だが、ここまでは予想通りだ。

俺はじっと耐え、機会を待ち続けた。

やがて、機会が訪れる。

残HPは10%以下。あと一撃で、俺は確実に死ぬ。

「これで終わりね！」

勝利を確信した彼女が、鉄槌を振り下ろす…ここだ！
この瞬間を待っていた。

ドンドコドン

鳴り響く太鼓の音。

トドメの一撃が、寸前で停止した。

盾を捨て、新たに得た能力。

音楽スキル？鎮静化（peace making）？

あらゆる物理戦闘を強制終了させる。

その効果は一時的なもの。

再び戦闘態勢をとればそれまでだ。

しかし油断から、彼女に僅かな隙が生じた。

（EXB…いや、だめだ。威力が足りない）

今、この瞬間に仕留めなければ勝機はない。
俺は、最後の賭けに出る。

A n E x P o r (パラライズ・麻痺の呪文)

彼女の動きを止め、その足元に
ありったけの爆弾を投げつけた。

もし彼女が、まだA P Bを切らさず持っていれば、
即座に麻痺を解除。
俺は一刀に臥される。

敗北を覚悟せねばならぬほど分が悪い…。
絶望的な賭けだ。

五秒後。紫ポーションが炸裂、誘爆を起こす。
カウントダウンが…始まった。

: 4 : 5 :

彼女は動かない。

: 3 :

「あのところにもどれたら…」

： 2 ：

「糸を紡いで」

「服を売って」

「お金もスキルもなくて」

： 1 ：

「でも、楽しかった」

「あところに…」

それが、最後の言葉だった。

完結編に続く

【A P B】

パラライズを解除するアイテム。無駄に爆発する。

【E X B】

エクスプロージョン エナジーボルトの連携攻撃。
攻撃魔法エクスプロージョンは少し遅れて爆発する。

この時間差を利用して、エナジーボルトを重ね当てる。

平和への序奏（後書き）

あとがきをどうするか、悩んでいます。

エピソード（前書き）

【あらすじ】

愛する者を、その手にかけて主人公。
トラメルが現れる直前、激動の時代。
待ち焦がれていた平和が、
ようやく訪れようとしていた。

エピソード

ここはトラメル・ブリタニア第一銀行前。

俺は、あの戦いを最後に
対人戦専用キャラを封印した。

今はB T Mを育てる傍ら、ここで馬を売る毎日だ。
隣では熊戦士が行商をしている。

「ここは平和だ…」

「ああ、そうだな」

銀行の周辺には、

居眠りする人…
裸で走り回る人…

フェルツカでは考えられない光景だ。

「俺たちP K Kの時代は、もう終わった」

「これからは彼ら」

「トラメラーが」

「このブリタニアを支えていくんだ」

見ると、ナマハゲが鹿マスクをつけて、
顔見知りと、じゃれ合っている。

「鹿戦隊集合！」

「頭突きじゃ〜！」

「…」

俺たちは他人のフリをした。

「あのー」

「すいません」

いきなり女性キャラが話しかけてきた。

「ぎるど」

「はいりたいんですけどー」

「いれてください」

やけに、ひらがなの多い人だ。

そういえば、あいつも…

ふと、

この手にかけた彼女の面影が脳裏をよぎる・・・

・・・

…っか。

名前まで同じだ。本人に間違いない。

「もしもし？」

なんて図々しい奴だ。

元プレイヤーキラーを入れるほど、俺たちのギルドは甘くない。

「そうだな」

俺は彼女に背を向け、考えるフリをする。こいつに世間の厳しさを教えてやらねば。

「どうしたものか…」

…よし。

ここがいい。

パタリとルーンブックを閉じる。

俺はニヤリとほくそ笑み、向き直った。

「じゃあ、一つ」

「テストをしよう」

俺とP・Ker Killing | 完

【あとがき】

ゲーム内でお会いした皆様、お久しぶりでございます。
それ以外の方々は始めまして。

『ゲームは一日30分』を座右の銘とする、いざよいでございます。
まだ引退してませんよ。

ウルティマ・オンラインというネットゲームは、
ゲーム内で小説を書いて売ったりすることができ、
すごいゲームなのですが、

この本がまた、ものすごく書きづらい。
そして、読みづらい。

なもので読みやすさを重視するあまり、
泣く泣く文章を削ったりしながら書いていたもので、
今回、ネット小説という形で当時の憂さを晴らそうと
思い立った次第であります。

ちょっと悩みましたが、
本編よりもご好評をいただいた本書解説とQ&Aは、
ゲーム内で原本を探し出して、読んでみてください。

あれから四年になりますね。なんか、
いまだにロックしてくださる方がいるそうで、感激しております。
私信ですが、あまりベタばめされるとリアクションに困るだけで、
うざがってる訳じゃないんですよ。

このネット版では、最後にシャードで行商した際の印象をまとめ、
「俺とPKK」完結とさせていただきます。

【瑞穂】

ノリが良いです。良すぎです。

行列できて、必死こいて本をコリコリコピーしてるそばから、三・四人同時に感想を言ってきたので、俺は聖徳太子かよって感じで。

返答に困りました。

ただハラスメント（嫌がらせ）も非常に多く、ここで行商するには覚悟が必要。

【大和】

大人っぽい感じの方が多く、ハラスメントもほとんどありませんでした。

感想、助言をたくさんいただけて、非常に参考になりました。

小説を売り始めた初日、全く同じ内容の海賊版を隣で売り始めた、小憎らしいお茶目さんがいたくらいで、かなり快適に行商をさせていただいた印象があります。

【飛鳥】

大和と同じく嫌がらせが少なく、落ち着いた感じ。

ホームページの日記で紹介していただいて、ニヤニヤしまくっておりました。

推理小説を書いてて、犯人を当てたら賞金一万円ってのをやったんですが、間違って六万円渡してしまいましたね…。

【倭国】

割と早い時期に１０００部完了したせいでしょうか。

あまり印象に残っておりません。
うーむ。

【北斗】

小説をコピーして銀行前にばらまいたり、罵詈雑言を書いた本を手渡されたり、

アグレッシブな嫌がらせを受けましたが1000部完売。

ハラスメントのパターンは三種類しかないので、

ゲーム内作家を目指す皆さんは、早く慣れましょう。

1・転売

2・キャラ正面の三步前に立ち止まって罵詈雑言

3・悪口書いた本を手渡し

【桜】

嫌がらせが全くなかった紳士のシャード。

ここで念願の家を建てて、小説のベンダー販売を始めたわけですが、案の定、読者が感想などを書くゲスト本を荒らす方が現れて、苦笑いした経験があります。

私よりも相方がめっさ怒りまして…ちょっと引きました。

【出雲】

ハラスメント多すぎ。撤退。

濃度が下がったら再開すると約束しましたが、

…いえ、忘れていたわけではありません。

【無限（夢幻？）】

シーフっざっ。

以上でございます。それではこの辺で。

新感覚・電波系推理小説の方も宜しくお願いいたします。

エピソード（後書き）

せっかくだから、俺とPKK2の二巻まで載せときます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0621a/>

俺とP'Ker Killing_完全版

2010年10月28日07時41分発行